「無」の技術論　私の自然学①

食べもの･水･土･空気･･･すべて社会的加工品

環境危機が声高に叫ばれている昨今です。環境という概念は、生命という主体があるので出てきた考えで、三十億年余り以前、生物個体が地上に誕生したと同時に、いま私たちが使っている概念のモトができたことになります。生物の内部と、生物を囲む外界が、このとき区分されました。

モトはといえば、地球そのものからいろいろな要素が組み合わさって、生命が誕生しました。それ以外の材料はありません。したがってどんなに生命が進化したといっても、生命が環境という外界との間で始終、物質の交換をし、体内で化学変化を通して、エネルギーや必要組成物を獲得しながら自己の体を保全し成長・成熟し、不要なものを外界に排出しないと、生きていけません。

現代、外界である自然との接点が少なくなっている私たち人間界です。イワシやサンマ等の大衆魚群はともかくとして、昨今では、ほとんどの場合、飼育され栽培されたものが私たちの食品です。太古の生物界と環境との関係とはちがって、環境には人間自身の手が加えられ、水も社会的加工品になってしか口にできないのが現実です。外界との物質交換といっても、ほとんどが人間社会の構造が最も身近な外界であり、環境となっているのが実体でしょう。ヒト以外の生物も、癌細胞のように異常に増殖した人類の影響で、土すら人間の財産となってしまった地表で、苦難の日々を送っているといえます。

財産化されずに取得できるのは空気だけでしょうか？　いや、それとて、文明とか名付けられる人間界の活動で、安心して吸い込めないのではないか、というぐらいです。　雨ですら汚染が進んでいて、雨水の汚染がもとで北欧の湖に棲む魚たちが全滅したという情報もあります。

宇宙が、途方もなく長い時間と巨大な力で創造したこの大きな土と緑と水の惑星も、危機状態があらわになってきました。地球上の生物群が生存しづらくなっっています。元凶はヒトという動物の自己中心的な振る舞いであることは、各界の心ある人たちが提言されているすべての言葉に明らかです。科学的表現を使って言えば”生態系の危機”ということでしょう。

すなわち、外界には、今やマトモな食べモノが激減していて、あらゆる生物種の健全な生命現象が、あるべきものから遠いものになりつつあるという警告を、もっと強く継続的のする必要があると思うのです。

地球にやさしい？――――　なんとオゴリの表現か

桜沢如一先生の言によれば、食べ物の偉大にして神秘な力を知るには、断食してみなくてはならない、というのです。　飽食をしながら、環境問題、特に食糧の尊さを論議するのはルール違反、ということでしょうか。

「環境問題」とは、「公害問題」を源流にして語り出された言葉で、人間社会がつくり出した環境への害毒作用がたいそう深刻になり出したので出された警告の言葉でした。

地球の生物体系そのものが崩れはじめると、それらを食べて生かしてもらっている人間が生存できにくくなるという恐れからできた言葉が「公害」ということでしたが、その広まりが予想以上に大きく、「環境問題」とか「環境科学」という言葉が日常の情報紙面やTVでさかんになり「害」という語が消えたように見えます。汚染という語がよりスマートな響きで用いられているようです。そういうことと並行して、「宇宙船地球号」とか「地球に優しい」という言葉が出てきました。

ここまでのあらゆる言葉のどれを拾ってみても、常に人間社会が中心になっているようです。　人口問題、南北の資源配分問題、食糧問題など、どれ一つを取ってみても閉鎖系世界である地球号のなかでは、とめどない物質的生活の利便さを人間が求め続ける限り、地球規模での行き詰まりが行く手を遮るのは見えみえです。

地球生態系の仲間は、何百万種とも言われる多種多様な微生物群から、両生類（カエル・イモリなど）・爬虫類（トカゲ・ヘビ）などの変温動物から、昆虫類、鳥類、哺乳類、魚介類、それらの生命を支えるあらゆる植物や海藻類・・・・など、正の万物に値します。あらゆる個体、肉体の生命は、モトをただせば環境食べモノ　　自体であります。本来、切りはなしては存在できませんし、生物界も、それ自体環境ですので、今となっては、生物を切りはなした環境なんて、あり得ないわけです。環境の健康度は植物・動物・万物の健全さの土台であるばかりか、それそのものなのです。水や空気を範疇に入れますと、そのすべては、私たちのすべてであります。宇宙空間とは”光”や”宇宙線”それに、空間そのものでつながっています。そういうものは皆が皆、優しいのです。だから、数十億年もの間、生命集団が生態系の進化という形で続いてきたわけです。

「地球に優しい」商品だの、行動だの、という言葉がやたらと氾濫していますが、優しいのは人間ではなく、”地球”なのです。まるで主客が転倒、真理をさかさまに間違えてみている人間のオゴリが表に出た言葉です。宇宙船地球号・地球に優しい・・・というような、科学動画を連想させる言葉を乱用することで、いかにも真理に添って前向きに、理性的に正しく生活しているような錯覚に陥ってはなりません。

地球の反撃

何万人という「偉人」たちが、〇〇賞と銘打った勲章や△△博士号などをひっさげて文化・文明を構築することに貢献してきました。それらの多くは人間社会の役に立っています。そして、その役立ちを評価し合っています。人間同士が、お互いに偉業などと言って喜々として勲章や位を与え合っています。しかし、それは宇宙や地球が絶賛してくれたわけでも何でもありません。ある巨大な視点から見ますと滑稽なことでしょうね。人間たちは、地球生態系のなかでの自分の立場を宇宙視野で見る力（習慣的・反射的な感性）を失ってしまって長い時が経ちました。少なくとも私にはそう見えます。

飽くなきヒトの物質的利便・快適さの追求のために、他の生物たちを犠牲にしつつ、人間どもの植民地になり下がらねばならぬ義理など地球には毛頭ないことを知るべきでありましょう。

退行性疾患・アトピー性炎など、生命体の深層が痛む多すぎる病状現象、実像が明瞭に浮かんでこないエイズなど、地球の反撃は始まっています。環境はモトモト生物そのものであると前述しました。環境の健全そのものであります。生態系学者の多くの人々の環境論のまま見られる”人間中心”という無意識的な対応のなかに、知識編重が持つ虚構性のごときものを感じることがあります。現代人の多くは近視症か、独善病か。

宇宙・地球の巨量を意識する

この連載を冠した「無」はいわゆる「有」と対立して相対的な意義づけをするために用いられる無ではありません。有とか無という日常的な意味が反射的に私たちに発する対立をすっかり消し去って、ただただ”無”と口をつむってみてください。すなわち、身体や頭で感じる有限の世界を、もの凄く、途方もなく大きく包んでいて、それがゆえに見えないし、忘れている”無”と呼んでいる存在の法そのものと思って欲しいのです。

宇宙空間の砂粒のように浮かぶ”水の惑星”地球そのものの姿を想像してみてください。道を歩いても、列車に乗っても、友人と話し合い、ビジネスに専念していても、所詮は地球の上のケシツブのような営みです。具体的に大地だの、太陽だの、星くずなんて文学的な表現をしてロマンを感じ、感動を自然から釣り上げながら、生きている実感をしています。それでも地表に移り変わる四季春秋、朝夕の雲の流れ、風、緑の草々に樹木、石や山や河川湖沼、凄いビルディング、新鮮な広告、ネオン、音楽と対象は宇宙地球像ではありません。宇宙・地球そのものの巨量計測不能の時空を意識することはごくごくマレでしょう。

生命の実像である宇宙・地球自体が具体的に意識に登場しないで過ごしているのが日常ではないでしょうか。しかし、すべて万物の根源は、肉眼ではどうしてもキャッチできない、通常の意識ではとらえ損なっている宇宙地球の存在そのものなのです。それこそが根元的で絶対的なのです。地表のモノ・すべてはその”無”の力から湧き出されているのですね。

文字にとらわれずに、素直に感性で直観してください。そこでは、無の本質が磁波のように体をつき抜けます。すなわち、そのとき、無の本質とは「有の根源」であり、創造的なモノであることに気づけるのではないでしょうか。「気」あるいは宇宙の一意的な力、または時空を越えた大宇宙創源の振動、などというふうに”無”を置きかえて認識しても悪くないのでは、と考えたりします。

文化だとか、理性だとか近世以来の哲学的理論を引き出して評論するようでは”無”＝宇宙の根源的創造力はますますわからなくなるかも知れません。

物も心も人もすべて「無」から生まれてきた

無とは、したがって「何もナイ」という意味ではなく、相対的な有の世界の深奥にある「絶対」をさしているわけです。こういう絶対的なものは、宇宙自身との直接的対話で直観すべきもので、人間の小さな枠組みの知識で混乱させるとたちまち見えなくなる類のものでしょう。

ここにいう小さな枠組には、決まって（判で押したような）特徴があるのです。それは「我」とか「俺の」とか、まるで脳細胞や感性も自分の作であるような錯覚です。「私の発明」「俺の技術」「わしの理論」　　という姿勢がまったく無いようにはできないかも知れません。しかし、その想いの裏に、必ず、その能力なり資質自体は自分で創造したものではなく、全部、宇宙地球の力でいただいて、預かっているものに過ぎないのだ、という真実への認識がしっかり貼りついたものでなくてはなりません。それがなければ世に役立つ本当のモノ・価値を創造するのはむずかしいのではないかと考えさせられます。

事実「自分」なんてものは元来”無”いのです。”考える”という能力だって、深層を探れば全部、「宇宙まるごと」から降ってきたものに外ならないはずのものです。「私の」というのは、人間の社会における便宜的なものであることを知って適時用いるべきが本来の経というものではないでしょうか。謙虚とか謙譲とかいう皮相的なことでは決してないのですこの際の話というのは。

しかも、ヒトに至るまで、数十億年かけて地球が準備した微生物以来の生態系の進化の膨大なプロセスが、私たちの細胞の隅々まで浸みわたっているわけです。まして、何も無い宇宙空間からその地球も誕生したわけです。素材の原料も全部、地球を通して宇宙がくださったものばかりです。だから宇宙船、スペース・シャトルができても、トンボの羽一枚できるわけではない。”考える”という力だって例外ではありません。まったくのところ、考えるという力というか、エネルギーというか、それこそ考えてみますと、無から、すなわち、絶対的に創造的なトコロから有が得られている典型を観る想いがします。ヒトの体はおよそ六〇兆個の細胞でできているといわれています。細胞六〇兆個が集まって、どうして心ができたのか。精神というモノがどういう仕組みで宿ったか。

優しさ、思いやりって何でしょうか。犬や猫、鳥や蛙に至るまで、ヒトの優しさや、相手を思いやる気持ちがハッキリと通じるという事実が、この社会にはたくさんあることが情報記事で知らされます。

現在までの科学技術というものは、こういう宇宙地球のホコリのように湧いた生物の本性、その長大な進化の不思議、環境への適応でのみ生存し得たという事実を無視してきたきらいがあります。だから、長大な適応のプロセスを無視した結果、水も土も作物生産、森林管理も、すべて「人間の快適さ」演出のために行うことが素晴らしい科学技術のあらわれだと賞賛されてきました。

環境衝撃、すなわち、他の生物群の生存条件に有害な破壊をもたらす技術が果たして技術の進化と呼べるのか、という反省がいまクローズアップされているのは、今日までの考

え方や鋭く賢明だといわれた科学技術の多くが、どこか間違っていたという証でもあるわけです。

「現代農業」（農文協）１９９５年（平成７年）１月号掲載

ご注意

1. 掲載文書は執筆時の生データを基にしていますので、推敲を経て実際に出版された文章とは若干違う場合があります。悪しからずご了承下さい。
2. リンクはどのページでも確認不要です。
3. 商品宣伝・商用目的の引用についてはお断りする場合があります。
4. 本サイト に掲載されている記事・コラム・解説文・写真・その他すべての無許可転載を禁止します。あらゆる内容は日本の著作権法及び国際条約によって保護を受けています。

Copyright 1995-2005. "Copyright Yoshinori Hirai ". All rights reserved. Never reproduce or republicate without written permission.

微生物的環境技術研究所　http://www.bikanken.com/